

芸術創作活動へと人を向かわせる心理的過程に関する臨床心理学的研究

—「アート」と「生」が両立する場のフィールドワークと、芸術家の創作体験の検討を通して—

大阪公立大学大学院 | 現代システム科学研究科 | 周小璇 | 博士後期課程研究・検討段階

1 問題意識・研究目的

創作を「作品の価値」や「治療効果」から説明するだけでは、なぜ人が創作へ向かい、続けるのかという体験の核心を捉えきれない。

本研究では、創作をその人の生活・身体・他者・社会との関係のなかに置き、創作へと人を向かわせる心理的過程を臨床心理学的に検討する。

問い：人は、何に動かされ、どのように創作へ向かい続けるのか？

2 研究の構成

① フィールドワーク：研究の中心

障がいのある人が継続的に芸術創作活動を行う場に約2年参与し、創作の継続、語り、身体的行為、他者との関係、作品の変化を観察する。

② 芸術家の創作体験：比較・思考の補助線

坂本龍一、村上春樹などの人生経験・創作過程・作品・語りを検討し、フィールドで生じた問いを、障がいの有無を越えて創作一般の問題へ開いていく。

3 現在見えてきている仮説 — 「ズレ」は創作を始動させる感受性になりうるか

現段階では、創作への熱情の一部は、自己と他者／社会／環境とのあいだに生じる「ズレ」を敏感に捉えることと関係するのではないかと考えている。

ズレに触れる

違和感・摩擦・
微細な差異

とどまる

すぐに解消せず
「わからなさ」を抱える

創作する

身体・素材・技法を通
して
形を与えようとする

作品として外在化

他者に開かれた形で
ズレが現れる

再び揺さぶられる

他者の受け取り・偶
然・
新たなズレ

創作とは、「ズレ」をなくすことではなく、そこにとどまりながら、何らかのかたちを与えていく営みなのではないか。

坂本龍一の検討では、個人的な違和感が外的制約・文化的／社会的摩擦へと広がり、創作の力へ変化していく過程が見られた。村上春樹と河合隼雄の議論からは、「わからなさ」、コミットメント、身体性、偶然性、他者との共有という視点が得られた。

4 「ズレ」をめぐって、さらに考えたいこと：

- 「ズレ」を感じることで、そのまま創作につながるとは限らない。どのような体験や環境、他者との関係を通して、それが創作へと展開していくのかを検討したい。
- 「ズレ」は個人の特性としてのみ生じるものではなく、その人を取り巻く他者や環境、社会的な価値観との関係のなかで感じられるものでもあると考えられる。
- 社会との「ズレ」は、生きづらさとして経験されることもあれば、それまでとは異なる仕方で物事を感じたり、捉えたりすることにつながる場合もあるのではないか。
- 創作は「ズレ」を解消するものなのか、それとも、それを抱えながら新たな形を与え、他者や社会との関係をつくり直していくものなのか。今後さらに検討していきたい。

5 考察の方向性

他者や社会との間に感じる「ズレ」は、必ずしもなくなっていくものではないのかもしれない。

むしろ、そうした「ズレ」を抱えながら創作を続けるなかで、それまで言葉にならなかったものや、本人にもよくわからなかったものが、少しずつかたちになっていくことがあるのではないか。そして、それが作品として他者の目に触れることで、そこから新たな関係が生まれる可能性もある。

創作することは、「ズレ」を抱えながら、他者や社会と関わっていく一つのあり方なのだろうか。

6 今後検討したいこと

フィールド

創作へ向かう瞬間／止まる瞬間
／再開する瞬間を、生活・身体・関係・場の変化とともに記述する。

芸術家研究

坂本龍一・村上春樹等の創作体験を、個人の伝記的説明に閉じず、それぞれが経験した「ズレ」が創作とどのように関わっているのかという視点から検討する。

臨床心理学

「適応／不適応」という枠組みだけでは捉えきれない創作のあり方について、「ズレ」を抱えながら他者や社会とどのように関わっているのかという視点から考察する。